



を出發しました。春のうららかな日でした。

「知らぬ他國の古市や、弥陀の仏に導かれ、清き流れの番近川、下る我が身の行末を、護る龍護寺觀世音、古におろかみこぎ行けぬ、塩焼く浜のありと云ふ、小手を分ざせぬ沖の方、霞みてしかと見えぬとも、見えぬ古更しのびる、大江の灘を望みつつ、こゝ蛇崎の鼻をれば、堅田の里もほど近し。馬手に見ゆるは城八幡、南無や八幡大菩薩、武運つたなき一糸の、再興給へと念じつつ、柝手打つて相江の、港に祀る熊野社を、はるかに祥し清き上る、嘉吉の歲の頃とかや、周防の國の大内勢、三百余艘の水軍は、佐伯の氏を攻めんとて、潮の如くよせ来る、宇山の城の見ゆるなり。この時佐伯惟世は、てたてをもちて水軍を、堅田の海に追い落す、磯波の物語、さきつの上る大越の、川口近き汐月村、汐の満ちたる岸辺に着きにけり。」

上陸した一行は、近くの百姓八頭の白井に一体のし道案内をさせました。阿弥陀如来を先頭に陣道つたいに長蛇の列を作り、汐月の鎮守の森にはいつて行きました。今の長良神社で、佐伯十二社の内の一社に参拜し、佐伯氏族の居館上の台の裏道を登り、岸河内峠に消えて行きました。

峠を下れば岸河内の鍛冶屋村、大越川を渡って津留の地村、觀音崎と越水成上屋村の金剛寺につきまします。和尙に迎えられた一行は、阿弥陀仏を手に納め右のでありま

ぬけから(蛇)は尾長良権現として祀る、仏と神と蛇とがらませた神祕な物語りが生まれる。まさに傑作でありま

す。(白井家に伝わる刀道案内のお札として兼定卿より賜わつたもので、今は紛失してありません。) 其の後問もなく大友宗麟の寺社取つぶしの綱が出て、軍兵に打ちこわされ、仏は難をのがれ津留の地の大願寺に祀られました。天正十四年(一六二九年)十一月四日陸軍は岸河内に進入し焼打の戦火にかかり、阿弥陀如来は

大越川に投ずられました。この時御手の一部を破壊し後修理したことがあります。拾われて白井の家は一時難をさけましたか、潮谷寺に迎えられて高畑に行き、四代登壇上人が現在の潮谷寺に迎えて本尊として安置したのであります。

さて兼定卿は宗麟に呼ばれて白井に行きました。女婿のため新館が建てられ、御扶持を給して住居させ、土佐に残した夫人も宗麟の討らいて柴田次右衛門尉を便として、姫居もろとも白井へ迎えられました。

兼定卿の白井に於ける生活を大友興隆記は次のように書いてあります。 海辺の旅宿の御住居、つれづれの折柄は昔を思召し出され、岩に砕くる波と共に御心を砕き給ひ、又或時は汀の松に言問ふ風のたむく日は、片萩枕の夢を醒まし、憂きことを忘れまほしき折からは、歌をよみ詩を作り日を送り給ふ。斯くある所に如何なるかたこと云ひやはみけん

一でうやつくりたてたる致ぶすま やぶれ果つればこよめきませす 大友宗麟は永祿六年に丹生城を築かせ、九年宗麟と号

し丹生城に隠居、キリシタン大名として港には南蛮船の出入もしげく、城下町に繁栄していました。兼定は父宗麟のキリシタン信仰に感化をうけ、進められて洗礼をうけ「ドン・パウロ」と呼ばれるようになりました。キリシタン信者となつた兼定卿には佐伯にあげた阿弥陀如来日不用のものとなり、白袴へ迎えようとはしませんでした。

兼定は亡命の生活には堪えきれず、何時か赦あらば再び中村を奪回して、昔の御所に返り咲くことを念願して一か年、密かに伊豫の國へ渡り、一條藩の旗印にフルス十字の旗印を押し立てて、大友其の他の援軍、旧臣、野伏、百姓の軍勢をかり集め、御生（御庄）より土佐中村へ急進撃を開始しました。四万十州を挟んで長宗我部軍に對し、死闘を三日にして勝敗は決し、兼定卿は思ふをのんで退却するよりほかありませんでした。

法華津城主播磨守則延は兼定卿をおわれがり、宇和島の外海五里に浮ぶ小島、<sup>比島</sup>と諷して、ここに移住させました。家来はもろから六十人、敢軍の將とは云え土佐の国司の身をもつて小島に身をかくす、まことにあわれであります。

長曾我部元親は四國制覇は仕とげたものの、天正十三年（一五八五年）豊臣秀吉の四國征討となつていに降伏、僅かに数か月の夢と消え去りました。

土佐一國を安堵された元親は、戸島に居る一条氏が氣掛りであつたのでしよう。兼定の侍入江左近をそのかし、報償でつり、兼定卿暗殺の密使として戸島に渡らせました。入江氏は一条家土佐入國の時、東小路、西小路、飛鳥井、白井氏と共に京よりお供して入國、以来代々の主づつかえ、ことに入江左近は兼定卿の小姓として、御

所の身辺にあつて親しく仕えていた者が、こともあろうに刺客として戸島へ渡ろうとは誰も考へなかつたこととあります。「まづおる者となないこの小島によくぞ来や

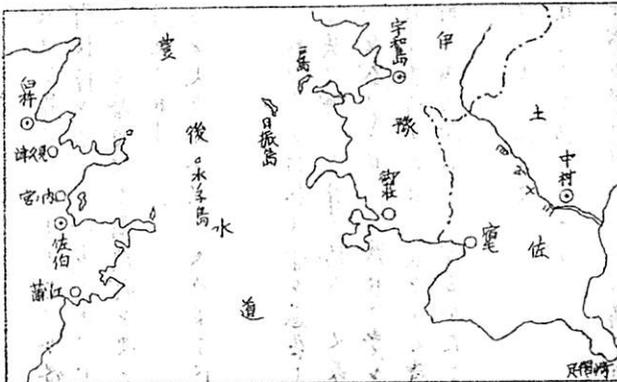
つた。うれしいぞ。」と大喜びの兼定でした。それが或る酒宴の夜半左近は兼定を討ち、島を逃がけ出しました。天正五年（一五七七年）の出来事で兼定は三十四才でありました。兼定卿は殺されたといふが、キリシタンの文献では重傷を受けたが、それから十年後病死したことになつています。

兼定の一子内政は先に阿波に移され、後大津に御所を造り元親の女と夫人におてがわられていました。友が、謀叛ありとされ法華津に追放されて殺されました。時に天正九年の二月、二十二才の若さでありました。

土佐一条家はかなしい運命にもあそばせられたから終に滅亡しました。潮谷寺の御本尊が私の想像通り、もし一條家の遺物でありましたら、せめてのこと、供養してやりたいものであります。

（お断り）一條家のことについて「大友興築記」に入江氏の「長宗我部氏の遺言」

「大友興築記」土佐一条家の御本尊が、家来にして、法華津に御所を造り、



「大友興築記」土佐一条家の御本尊が、家来にして、法華津に御所を造り、